



繋がり伝える気持ちと税

大田区立安方中学校 三年 浅原 希美

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう」

九年間、欠かさず教科書の背表紙に小さく書いてあったこの一文。この文の意味が分かるようになってからは、毎年「また書いてある」と見つけて、心の中でお礼を言っている。

教科書に限ったことではない。公立の学校に小中学校の九年間通った場合、私達の学校生活を支えてくれる税の総額は一人当たり約七九四万円。頭が真っ白になるほどの大金。具体的な数字を見て、こんなにも税に助けられているのなら、先生が校舎や校内の備品を大切に使うよう呼びかけているのも当たり前だと思った。

私は税に関して知識も興味も全く無かった。「子供の私には関係ない」と意識することが無かったからだ。いつか分かるだろうと思いつながら過ごしていたが、妹が何気なく口に出した

「先生や警察はいっぱいいるのに、お給料の税金って無くならないんだね。」という言葉を不思議に思い、そこから少しずつ税金について興味を持つようになった。

税について調べていると、嫌でも目に入る言葉があった「税金泥棒」、

様々な意味があるが、税金をもらって生活している人を非難する言葉だ。私はこれを見るたびに、疲れた顔をしながら毎日働いている学校の先生を思い浮かべた。それほどまで働く公務員の方を、私は非難する気にはなれない。むしろ、国や地域のために働いてくれていることに感謝の気持ちでいっぱいだ。

では、なぜ「税金泥棒」の言葉が生まれてしまったのか。私は、税に払うものという印象が強いかだと考えた。それでは「あの人税をもらっている、するい」と公務員へ怒りが向いてしまうのも理解できる。ただ、私達は必ず税に支えられて生きている。税が無ければ医療費は今の何倍もかかるし、「コロナでの十万円の給付なんか無かっただろう。全額キツチリと自分に返ってくるわけでは無くて、どこかで誰かの役に立っているのなら嬉しいなと心から思う。姿を変えて私達を助けてくれる税は、まるでピンチに駆けつけるヒーローだ。

私は将来、教員になって大好きな国語を中学生に教えたい。その時の教科書も税金から支給されているのだろうか。もしそうだったら

「教科書や机、椅子などは、国内のたくさんの方が払った税金が私達に返ってきているんだよ。だからこそ、大切に使おう。」と、伝えられたいいなと思う。